

授業におけるチャットツールの利用とその効果

Use of a Web-based Chat System in Class

江上 邦博

Kunihiro EGAMI

千葉経済大学短期大学部

Chiba Keizai College

【概要】 手軽に授業の双方向性を高めるツールとして WWW チャットの可能性に注目し、実際にコンピュータ教室で実施している講義・実習科目で利用した。この環境下では学生の反応・理解度を即時に確かめたり質問を受け付けたりすることが可能になり、授業改善の効果が認められた。実践の成果とその評価について報告する。

【キーワード】 WWW, チャット, 双方向通信, 授業支援, 学習意欲

1. はじめに

近年、インターネット技術を様々な科目・教育に利用・応用しようという試みが続けられている。WWW を用いた教材提供は多くの組織で行われており、旧来の教授法を改善するものとして、電子メール・メーリングリスト・掲示板等の双方向性の高いメッセージ交換手段を授業に用いる試みもなされている。

しかし実際にこれらのツールを授業で利用して意味のある効果をあげるためには、多くの準備・運用の手間が必要になり、教員側の負担が増加するため、授業での常用には躊躇させられる。

また最近、学生の学力低下の問題が話題に上がることが多くなってきた。こうしたことは、これまで前提としてきた知識の未修得(学生の多様化、選択科目の増加)、授業内容の理解程度を読み取ることの困難(無反応化)、質問する学生の減少(積極的な学生の減少)等により計画的な授業運営が難しくなっているという事実と無関係ではないと思われる。であるとすれば、これらの困難への対応には、授業を魅力的にし、学生の興味を喚起する工夫が必要となってきたと思われる。

ところが一方で学生が WWW 上又は携帯電話でのメールやチャットに積極的に参加している姿がしばしば見受けられる。チャットシステムのこうした面に、授業を改善し履修者の興味を喚起するヒントがあると考えた。さらに、情報系の教育・授業以外でも手軽に扱え、即

時・即興的な状況下で利用できる支援ツールとしても期待できる。

2. 方法

利便性・操作性・学内システムへの配慮等の面から WWW 上に構築されたチャットシステムを使用し授業での効果を見ることにした。ここではチャットシステムの開発が目的ではないので、ネットワーク上で公開されているフリーウェア(「ゆいちゃっと」等)を積極的に利用した。

授業で使用している全体システムは非常に単純で、必要なものは学生側で動作する Web ブラウザ環境と、チャットシステムが動作するためのサーバ環境だけである。現在は諸事情によりシステムのサーバ部分を学外に設置して学内から proxy 経由でアクセスしていることと、後に授業成果としてログを活用したいという理由により、プログラムに若干の変更を加え

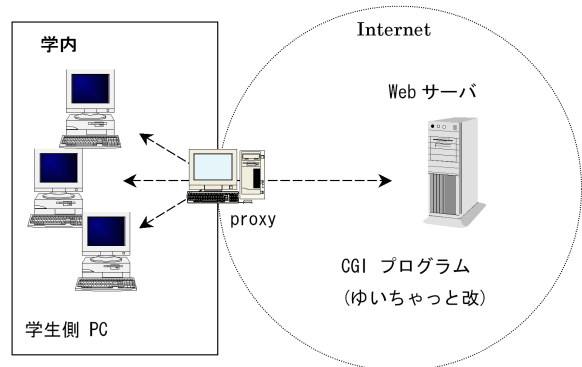


図1. システム構成

ている。改良点としては、教室内利用以外は除外するようにアクセス制御を行えるようにしたこと、アクセス時の変数を利用し教室内の利用者を特定できるようにしたことである。

ここでの試みの対象は本学経営情報科 2 年次の学生で、授業は専門教育科目に位置付けられた選択科目である。本学では 1 年次に情報機器・統合ソフトウェア・インターネット関連の基礎教育を履修することになっているが、実際の内容習得状況は学生によりかなりバラツキがあり、コンピュータ系の授業を履修する学生であっても必ずしもコンピュータが得意ではないということもある。こうした学生が利用対象となるため、必要とする前提知識などの初期ハードルを低く設定している。

実際の授業では、初めにブラウザでページを開かせ、後は学生の自主性に任せてメッセージを書き込ませるというポリシーで運用している。現時点では授業時の利用を学生に強制することはしていない。自由な雰囲気が損なわれ書き込みや利用が無くなることが一番の失敗だと考えるので、書き込まれるメッセージもよほどのことが無い限り注意したり制限したりすることはしない。こうした事情から、チャット上で話題になる内容や、会話の進み方、言葉使いは履修学生の構成により大きく異なってくるが、授業開講初期の雰囲気作りに大きく影響を与えているようである。

3. 結果

授業改善手法が WWW チャットのみに限定しているのではなく必要に応じて利用可能な様々なツールを組み合わせ使用しているため、その効果について定量的な評価を下すことは難しい。しかしチャットを利用した授業について学生にアンケートをとった結果には「発言しやすくなった」、「意外性もあり楽しい」、「すぐ質問できるので便利」、「直接参加しなくても見ているだけで問題解決のヒントになっている」等の意見が寄せられている。これらは教員側が受けた印象とほぼ同じであり、当初の目的を達することができていると思われる。またアンケート結果として意外だったことは、WWW チャットについての知識はあるものの利用した経験がない学生が大半だったことや、世相を反映してかチャットに対して悪いイメージを持っている学生が多いことであった。

実際にチャットを利用してみて教員側から効果的だと感じた点は、授業中はおとなしく直

接対面してはあまり話をしない学生でもこのシステムのおかげで率直な意見・感想を出してくれることである。さらに、コンピュータ実習系の授業では教員は頻繁に教卓を離れ学生の対応に追われることになるが、このような場合にチャット上で教師役に回ってくれる学生が出てきたこともあげられる。特に機器の操作やコマンドの使用方法についての解説を行ってくれる学生には助けられている。

これまでのところ、突発的に関係の無い話題が持ち上がることや無責任な会話が出てくることはあるが、授業に悪影響を与えるまでには至っていない。当初心配した課題・問題の解答を行ってしまうようなマナー違反をする学生も出てきていない。チャット本来が持つ匿名性をからくる問題については、授業中の使用であり利用者(履修者)が判明していることから押さえ込まれていると思われる。

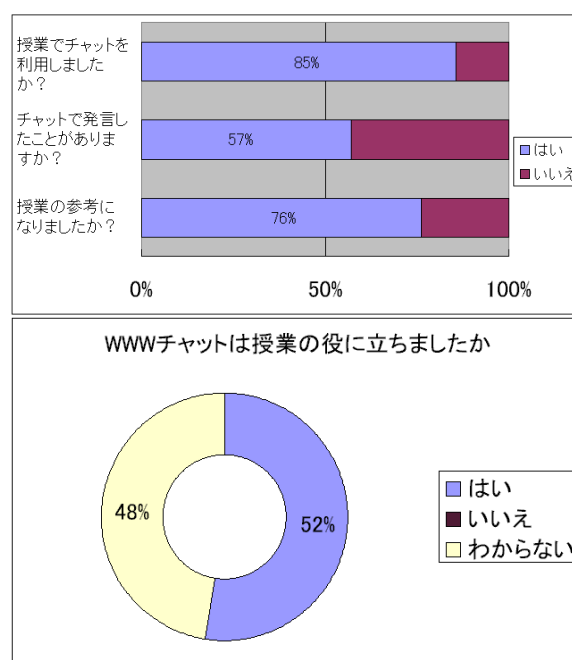


図 2. アンケート結果

4. おわりに

実際に授業にチャットを利用することによって教室・学生の状況をリアルタイムに把握することができるようになり、結果としてその情報を用いて授業の進度・対象・流れを動的に変化させることが可能になった。またチャットのように短く使い捨てのメッセージの有効性も確認できた。

今後の課題としては、チャット上でのやり取りを評価につなげる手法等の開発を考えてみたい。